

曲目解説

交響曲第6番「田園」

ベートーベン

30歳にして初めて書きあげた第1交響曲以来、一作ごとに独自の世界を築いてきたベートーベンが、1808年に世に送り出したユニークなシンフォニー。同じ時期に作曲された第5交響曲の異常なほどの凝集性とは全く異なる豊かな情感にあふれています。そこには、自然への愛と畏怖、生きることの喜び、神への感謝などが表現されているように思われます。音楽的には、メロディーも大変きれいなものですが、それよりも和声の対比、効果的な転調が、聴く者に深く、大きな意味を感じさせます。又楽器用法も精妙で、色彩感あふれるオーケストレーションがなされています。特に第2楽章における管楽器の使い方には、楽器の音色に対する深い配慮がうかがわれます。

この交響曲はベートーベンの作品の中でもきわだって美しいものですが、その美しさは決してなよなよとしたものではなく、むしろ力強く、生命力に充ちたものでしょう。第4楽章は言うに及ばず、第2楽章の展開部の終わりに現われる、スケールの大きな低音の動き、第5楽章結尾の全管弦楽による壮麗な転調などベートーベンならではのエネルギーが全曲を貫いています。一方、細部の繊細さはまた格別で、作曲者自身が各楽章につけた標題さえ、うっとうしく邪魔なものに思われるほど有弁です。

この曲の初演は、1808年12月22日(木)、アン・デア・ウィーン劇場で、作曲者自身の指揮によりなされました。

歌劇「フィガロの結婚」

モーツァルト

歌劇「フィガロの結婚」の原作は、フランスの劇作家(時計屋、密輸商人、成上り貴族、その他)ポームルシエの同名の戯曲です。ポームルシエは、パリ時計屋の息子に生まれ、父にその技術を仕込まれたものの、早熟の腕白で、13歳の時、初恋の女にふられて自殺をはかり、以後波乱万丈の人生を送りました。それは彼の代表的三部作「セビーリヤの理髪師」「フィガロの結婚」「罪の母」の主人公フィガロに大変似ています。というより、ある意味でフィガロは彼自身の分身だったのです。生活のために貴族になった彼ですが(宮廷財務官の地位を金で買った)、その精神において革命家であり、矛盾の中に生きながらも、フィガロに託して言わせた鋭い貴族批判は彼自身の本音だったのでしょうか。

「フィガロの結婚」は革命前夜のパリで大ヒットとなると同時に、その反体制的な点が物議をかもし、ウィーンでは上演禁止になってしまいました。当時ウィーンに来ていたイタリア人、ダ・ポンテはこの芝居をオペラにしようとモーツァルトに作曲を依頼しましたが、上演禁止を避けるため、毒のあるせりふを抜いて貴族批判の色を薄めたものにしました。(それでもその批判精神は随所に顔をのぞかせています)

こうして1786年、モーツァルト30歳の5月、歌劇「フィガロの結婚」はウィーンで初演されました。そして、その年の暮ブラハで上演されると、これが大ヒットになりました。モーツァルトとしては(少年期のものは別として)ウィーンで初めて世に問う本格的オペラ・ブッフアであり、意欲に燃えて取り組んだもので、結果は絢爛とした出来映えを示しています。

本日はその中から、二曲のデュエット、六曲のアリアをオーケストラによる序曲と二つの間奏をはさんでお送りします。